

ワシントン情報、裏 Version  
2005年1月15日  
竹中 正治  
「ハリウッドと刀」  
～映画に見る Cultural Fusion～

近年のアメリカ映画に日本刀、あるいは日本の剣術を模したバトルシーンが増えていることに気がついては少なくないであろう。“Kill Bill”や“Blade Trinity”を含むブレッド・シリーズ3作、そして今年1月に封切られた“Electra”など、ヒーロー、ヒロインばかりでなく、悪役達も含めた主要登場人物達が日本刀(ないしは日本刀のようなもの)でバッサバッサと斬りまくる。勿論“The Last Samurai”でも、トム・クルーズが演じる主人公が反乱武士の根城の村で剣術を身につけ、暗殺者に襲われた時にその剣術を發揮するシーンが見せ場のひとつになっている。しかし、これは幕末から明治初期の日本を舞台にした設定だから当然である。最初に紹介した映画群はそうした日本の歴史的設定とは無関係に「日本的剣術」が登場する。常に新しい刺激を追求しているハリウッドの監督達は、ブルース・リーの映画を契機に中国拳法・カンフーを取り込み、例えば映画“Matrix”のバトルシーンが出来上がり、更に日本刀と剣術を新しい魅力として取り込んでいるのだ。

【異色西部劇、“Red Sun”】

私が知る限りで、このトレンドの最初の試みは1971年の“Red Sun”である。これはフランス製映画で、19世紀後半の日本の幕末期の米国西部を舞台に、アラン・ドロ、チャールズ・ブロンソン、三船敏郎が主演した異色西部劇である。幕末に米国大統領に向けた徳川幕府の使節が西部に到着する。列車で東に向かう途中、盗賊達(その首領がアラン・ドロ)に大統領に献上する大切な宝剣を奪われてしまい、使節の護衛役の武士を演じる三船が一命を賭して奪還することになる。日本刀を見たこともない西部の荒くれ連中相手に、三船が剣術殺法を展開するのが魅力ポイントである。しかし当時15歳の私はこの映画を見て微妙な違和感を感じた。どんな剣術の達人でも、10メートルの距離から拳銃で銃弾を浴びればひとたまりもない。銃撃の戦いと剣術の戦いでは、バトルの「間合い」が決定的に異なる。その間合いの違いをこの映画の中は十分に調和しきれていなかった。だから距離を置いた銃撃戦では三船の動きは冴えず、銃撃バトルと剣術バトルが調和されず、異質なバトルとして分離したままだった。2つの異質なバトルの調和、一体化が後の映画製作者の課題として残ったとも言える。

【剣で戦うのがCool、“Star Wars”】

1977年、80年、83年のスターウォーズ・シリーズ3部作では、ジェダイの武器として“ライト・セイバー”なる光の剣が登場する。特に第2作の「帝国の復讐(The Empire Strikes Back)」では主人公の若きジェダイ、ルーク・スカイウォーカーとダスベエダの剣術バトルがラストシーンの見所となる。勿論これを西洋風の剣による戦いと見ることも可能であるが、ダスベエダの黒いマスクはまるで日本の戦国武者の兜のような形をしており、光る細身の剣を打ち合う様子は日本の時代劇の大立ち回りを模したような動きに満ちていた<sup>1</sup>。この映画で雑兵はビーム銃で打ち合い、一種の騎士階級としてのジェダイは光の剣、ライト・セイバーで戦う。剣によるバトルの方が“Cool”なのである。

<sup>1</sup> 西洋の剣と日本刀では、実戦上の使い方はまるで違うようである。西洋中世の騎士は金属の甲冑で武装していた。剣は肉厚で重く、相手を斬るのではなく、鉄製の甲冑の上からぶった叩き、打撃により相手にダメージを与えた。一方日本の戦国時代の戦場では武者も足軽もやはり相応に防具で身を固めていたので、細身の刀が当たった程度では斬れない。従って防具の隙間を狙って突き刺すような攻撃が一般的だったと言う。たいした防具も付けずにスパッ、スパッと斬り合う剣術は戦闘が非日常化した江戸期のもの、あるいは時代劇の産物かもしれない。

### 【孤独なダンディズム、映画“Blade”の剣技】

映画“Blade”は昨年暮れに第3作“Blade Trinity”を封切った。映画ブレード・シリーズはバンパイア・ハンティング・ストーリーである。日本の幽霊と妖怪ストーリーに相当するのが米国のゾンビとバンパイアかもしれない。ゾンビもバンパイアも米国映画で飽きることなく繰り返される題材だ。バンパイアとは吸血鬼であり、その王族の血統がドラキュラということになる。この映画では人間社会にはバンパイア達が正体を隠してはびこっており、隠れて人間の血を吸い、地下組織を形成している。彼らには超人的な運動腕力と再生能力があるが、太陽光線(紫外線)を浴びる、あるいは首を切り落とされる、心臓を打ち抜かれるなど致命的なダメージを受けるとボワッと燃えて、後には僅かな灰しか残さない。

数奇な運命からバンパイア・ウイルスに犯され、バンパイアと人間のハイブリッドとなった主人公ブレード(役者ウイズリー・スナイプス)は、バンパイアの超人的な運動能力と太陽光線(紫外線)の下でも大丈夫な身体を持つ一種の突然変異体“Day Walker”で、母をバンパイアに殺された恨みもあり、バンパイアの天敵となって連中を狩りまくる。バンパイアはどんなに沢山殺されても、後には僅かな灰しか残らないので、バンパイアの大量の死体が発見されて世間に存在を知られることもない。主人公と相棒(武器造りの名人)は決して世間に知られることのない孤独な戦いを営々と続けるのである。

主人公の得意の武器が背中に忍者のように刺し背負った細身で長身の剣で、これでバンパイア達をバッサバッサと斬り倒す。古今東西、スーパーヒーローはその正体を知られてはならない。スーパーマンもスパイダーマンも正体は隠されている。日本でも同じで、鞍馬天狗は言うに及ばず、月光仮面も「ど〜この誰だか、知〜らないけれど」と歌われた。しかし主人公ブレードはその存在も戦いも世間に知られず、その孤独は一段と深い。世間に知られることのない果てしない戦いを展開する主人公の孤独なダンディズムと、その超人的なバトルシーンがこの映画の魅力で、その立ち回りはやはり日本刀の剣術をイメージさせる<sup>2</sup>。

“Red Sun”で調和されていなかった銃撃と剣術のバトルは、映画“Blade”では見事に一体化されていて、二つのバトルの間に違和感がない。敵に襲撃を仕掛ける時は、距離のある間合いから銃撃バトルを展開し、更に間合いが接近し、白兵戦になると、ブレードは銃を捨てて剣に切り替える。その2種類のバトルの間には切れ目がなく、調和している。アメリカ映画はついに剣術を自在に操り始めたのだ。

### 【アサシン・ヒロイン映画、映画“Kill Bill”と日本刀】

アサシン(暗殺者)ものヒロイン映画の代表作と言え、1990年のフランス映画の「ニキータ」であるが、最近のアメリカ映画のアサシン・ヒロイン映画が、タランティーノ監督の“Kill Bill”(2003年)とその続編“Kill Bill 2”(2004年)である。この映画でタランティーノ監督は日本アニメや漫画の要素を隠さず、むしろ前面に押し出して、日本刀によるバトルを全面的に展開する。ヒロインは暗殺者集団の一員であったが、そこから抜け出す。日本漫画「カムイ伝」の「抜け忍」に相当する設定である。ヒロインは身ごもった身体で、田舎の教会で愛人と結婚式を挙げようとするが、抜けるのがご法度の暗殺者集団であるから、結婚式の場を襲撃されて、瀕死の重傷を負う。しかし、生き延び、暗殺者集団とその首領のビルに復讐するのがストーリー展開である。

<sup>2</sup> 映画ブレード・シリーズの第3作では、弓矢を得意武器とするヒロイン(Jessica Biel)が登場する。主人公ブレードの長年の相棒が死に、その娘として登場し、「戦うヒロイン」を演じる。へその下数センチまでしか届かないジーンズにタンク・トップで戦う姿はセクシーで、魅力的。しかし「孤独なダンディズム」をモチーフとしていた映画ブレードにとっては路線変更である。それほど今日「戦うヒロイン」のトレンドは強力で抗し難いということだろう。参照 <http://www.geocities.jp/takenakausa/200409-01.pdf>

映画第1作で、ヒロインは復讐に使う刀を求めて日本の沖縄に渡り、彼女に日本刀を造ってやる刀鍛冶が「服部半蔵」で千葉真一が演じている。日本人には、どうして刀鍛冶の名前が「服部半蔵」なのか？なぜ鍛冶場が沖縄にあるのか？全く不可解であるが、そんなことにはかまわず、ストーリーは日本漫画の如く展開する。この映画の中でも、銃で撃つのは野暮であり、決着は刀でつけるのが“Cool”になっている。

### 【双手剣 対 二刀流、映画“Elektra”】

今年1月に封切られた“Elektra”もアサシン・ヒロイン系映画であり、中国の暗殺武術と日本忍者ストーリーを合成したような得体の知れない想定で出来上がっている。映画の舞台はアジアなのかアメリカなのかすら判らない架空の世界である。主人公らを襲撃する魔の暗殺集団の刺客は忍者そのもので、武器として手裏剣が登場し、日本語を話す。最強の悪役は、日本人みtainな風采で、二刀流でヒロインらを襲う。一方、ヒロインのエレクトラは中国武術の「双手剣」と思われる武器を操る。一昔前の米国映画には、中国と日本の区別がつかずに双方の文化的要素をごちゃ混ぜにしたジャンキーな傾向が見られ、強い違和感を感じた。しかし“Elektra”の中国、日本要素の混合には、もっと意識的、確信犯的なものが感じられる。

### 【異質な文化要素を融合して展開する文化現象のダイナミズム】

ハリウッドの監督達は、従来の銃撃によるバトルに飽き、新しい要素を求めて中国武術や日本刀と剣術を取り入れた新しいバトルシーンを産み出し、それがまた人気を博していると言えるだろう。このことは異質な要素をフュージョン(融合)することで新しいパターンを産み出す現代大衆文化の性質を物語っている。

いや、これは現代の大衆文化に限ったことではない。古今東西、異質な文化要素とのフュージョンは、新しいパターンを生み出すダイナミズムの源泉だ。例えば「万葉集」は中国漢字の音や訓を大和言葉に当てはめた「万葉仮名」で書かれた当時日本の最先端の文化的フュージョンだった。当時の中国の知識人がそれを見れば、「野蛮な東夷の珍妙なる所業」と笑ったに違いない。しかし「万葉仮名」はその後「ひらがな」「カタカナ」を産み出し、漢字、ひらがな、カタカナを盛り込んで表記される現代日本の文章の原点となった。

あるいは12月25日は元々冬至を祝う祭日であり、別の神が祭られていたが、ローマ帝国のキリスト教徒がこの異文化要素を取り込み、キリスト生誕祭として塗り替えた。旧約聖書、新約聖書自体が、古代のエジプト、メソポタミアなど様々な文化・宗教的要素のフュージョンとして形成されたことは歴史学者にとっては当然の事実だ。紀元1世紀初頭のオリジナル・キリスト教徒が、12月25日がキリスト生誕日として祝われていることを知れば驚き、ローマカトリック教会により聖典と定められた後世のバイブルを読めば、その変容に呆然とするであろう。

古典文化が純粋で、現代文化が混成なのではない。全ての文化現象は異文化要素をフュージョンしながら展開して来たのだ。ただ古典の場合は、長い時間の淘汰を生き延び、かつて異文化フュージョンで生まれたことが通常は忘却されているだけなのだ。一方、同時代文化の場合は、何が生き延びて次のスタンダードになるか判らない混沌の渦中にある。音楽、絵画、文学などの古典は、相対的に長い時間の淘汰を生き延びた。生き延びた理由は、それが人間の文化的な環境や需要に対する相対的に高い適応性を示したからである。私はここで「適応性」という価値観上、比較的中立な言葉を使っておきたい。文化的な環境が変われば、適応性の内容も変わる<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 文化に「高い低い」の尺度は禁物である。しかし、文化的産物を個別的に「ジャンクなもの」と「洗練されたもの」に区別することはできるであろう。料理にジャンクなものや洗練されたものがあるのと同じだ。ただし「中国料理、日本料理、フランス料理」を比べて「上下」は言い得ない。

### 【マツケン・サンバの衝撃】

昨年の大晦日、日本語衛星放送でNHK紅白歌合戦を見た私は、松平健の「マツケン・サンバ」を見て、脳天をぶん殴られるような衝撃を受けた。キンピカの和服を着たダンス・ガール数十名のサンバ・ダンスをバックに、松平健がやはりキンピカの和服姿で「マツケン・サンバ」と名づけたサンバを歌い踊る。振り付けも異様で、マツケンがサンバ・リズムに合わせて、ラテン・カーニバルの踊り子のように腰をクネッと捻るしぐさなどは、思わず鳥肌が立つような猥雑さを放っている。この時代劇とラテン・サンバのフュージョンは、組み合わせてはならないものを組み合わせで造ったモンスターのような迫力で、脳裏に焼きついて離れない。一体どうやってこんな破天荒なフュージョンを考え出したんだ。

しかし異質な文化要素がフュージョンする混沌とした文化現象の最前線に「マツケン・サンバ」があるのだと気がついた。外国文化をフュージョンし、異質なものに仕立て上げて取り込んでしまう日本文化のダイナミズムが「マツケン・サンバ」に生きているのだと思い至り、ムラムラと賞賛の気持ちがこみ上げて来た。今年の春、ワシントンDCの桜祭りに松平健を招待し、桜の花びらが舞うポトマック河畔の特設会場で「マツケン・サンバ」を公演して欲しいとさえ夢想している。アメリカ人にもバカ受けするに違いない。ひょっとすると、「ジャパン・サンバ」として新しいトレンドになってしまうかもしれない。マツケン・サンバに魅了されたアメリカのゲイ達が、マツケンを真似て、キンピカの和服姿で腰を振り、サンバを歌い踊る姿を想像して、私は再び鳥肌が立った。

以上